

②④発熱性好中球減少症（FN）を知る （化学療法経過中の発熱の意味あい）

化学療法中の発熱にはいろいろな意味合いがあり、全てが重症というわけではありません。例えば抗がん剤使用中の発熱の大半は薬剤熱であり、放置しても構わないケースが多いです。化学療法前では腫瘍熱といって、病期自体が熱を出すことがあります。化学療法の経過中にたまたま風邪をひくこともあるでしょうし、発熱の持つ意味合いは様々です。しかし好中球が500を下回っている場合の37.5℃以上の発熱だけは注意が必要で、発熱性好中球減少症（FN）と呼んで警戒しています。何故ならば放置すると48時間以内に命を落とす可能性があるのと、抗菌薬の投与にて80%の割合で改善がみられることから、大部分細菌感染症と考えられているからです。これも経験された方は多いと思いますが、熱が出たら2か所から20mlずつ、合計40mlの採血がなされます。その後優秀な抗菌薬（ばい菌をやっつける薬）を1日3回のペースで点滴します。3日経過しても改善しない場合はCTをとったりカビの検査および治療をされたりします。長い間（1週間以上）好中球減少が続く場合はクリーンルームで経過観察することがあります。